



三度の出来事

切り紙細工の魅力

国際交流員 劉鳳

99

中国の切り紙細工（切り絵）は、「窓花（窓飾り）」とも呼ばれ、千年以上にわたり人々の生活に彩りと祝福をもたらしてきた民間芸術です。この民間芸術は、地理的広がりと歴史的深みの中で、各地域の風土と人々の生活感情を反映しながら、様々な様式を発展させてきました。赤を基調とした纖細な紋様は、単なる装飾を超え、人々の祈りや願いを形にした中国民俗文化の精華といえるでしょう。





歴史と発展

切り紙細工は長い歴史をもち、起源が北朝時代（386年-581年）に遡るとされ、紙の発明と製造とともに発展してきました。「円満で幸せ」という寓意を持っている1400年以上前の円形花模様（団花紋）の切り紙作品が、新疆トルファンで出土され、現存史料の中で最も古い实物証拠となりました。



最初は祭祀や宗教儀式で用いられていましたが、唐代（618年～907年）以降、装飾藝術として広く普及しました。宋代（960年-1279年）に入るとなびき紙業の発展に伴って切り紙藝術が特に隆盛し、切り紙の職人も現れました。明清時代（1368年-1912年）には、切り紙細工は技術的に頂点に達しただけでなく、文化的・藝術的表現においても極めて豊かなもので祝祭日の雰囲気づくりに欠かせない存在となりました。





技法と表現

「はさみ切り」と「小刀彫り」という二つの主要技法があり、一枚の紙を折りたたんで対称文様を作る「折り切り」も多用されています。

モチーフは縁起の良い文字（福、寿など）、動物（十二支、魚、鶴、蝙蝠、オシドリなど）、植物（牡丹、蓮、柘榴、ぶどう、かぼちゃなど）、神話伝説の靈獸・人物（龍、鳳凰、八仙、福禄寿三星など）、日常生活・物語（花瓶、灯籠、『三国志』、『西遊記』、『白蛇伝』など）、多岐にわたり人々の生活と密接に結びついています。

儒教文化の優雅な筆致

-山東省の切り紙細工-

山東省の切り紙細工は、地域ごとに異なる自然環境、歴史文化、生活様式を反映した独自の様式を発展させてきました。

滨州（ひんしゅう）、茌平（しへい）、高密（こうみつ）、煙台（えんたい）という四つの代表的地域の切り紙芸術を紹介したいと思います。





滨州切り紙（浜州市）： 力強い「黄河のハサミ匠人」

ここのはさみ使いは「大刀闊斧」（大胆かつ力強い）と称され、まるで黄河の流れのような大胆さが持ち味です。一度に数十枚もの紙を重ねてチョキチョキと豪快に切り進む職人技は圧巻です。主役は鮮やかな「五色門箋」。赤・緑・黄・桃・紫の五色が織りなす門飾りは、まるで人々の顔のようです。船頭や農作業の風景、舞い踊る獅子など、黄河と共に生きる人々のエネルギーがそのまま紙の上に躍動しています。

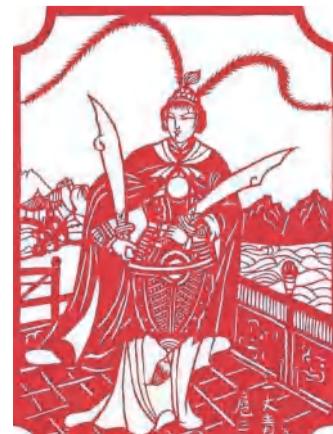
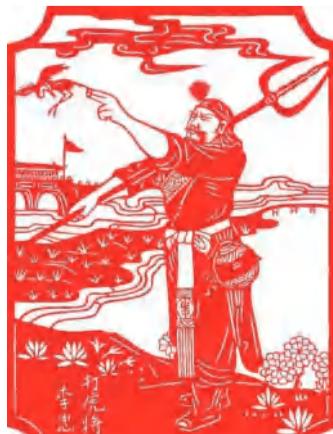
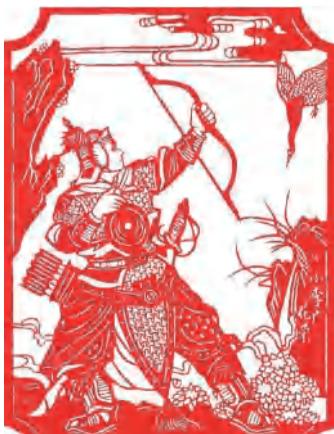
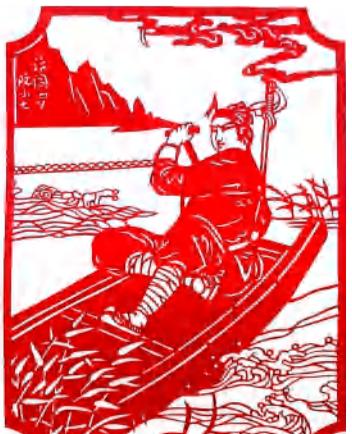


しへい

りょうじょう

茌平切り紙（聊城市）： 細やかな「運河の物語作家」

運河の町・聊城では、髪の毛ほど細い線を操る纖細な技が自慢です。「線刻切り紙」という技法を用いることで、水墨画に見られるような纖細な濃淡表現を可能にし、切り抜き後にはほのかに彩色を施すという粋な趣向にも特色が見られています。何より楽しいのは、切り紙が立体に変身することです！ パーツを組み立てれば、運河沿いの楼閣や、『水滸伝』の勇壮な英雄たちが飛び出します。一枚ごとにドラマがあり、見る人の想像力をかき立ててくれる、そんな芸術です。



高密切り紙（伊坊市）： 渋い「文人はさみ詩人」

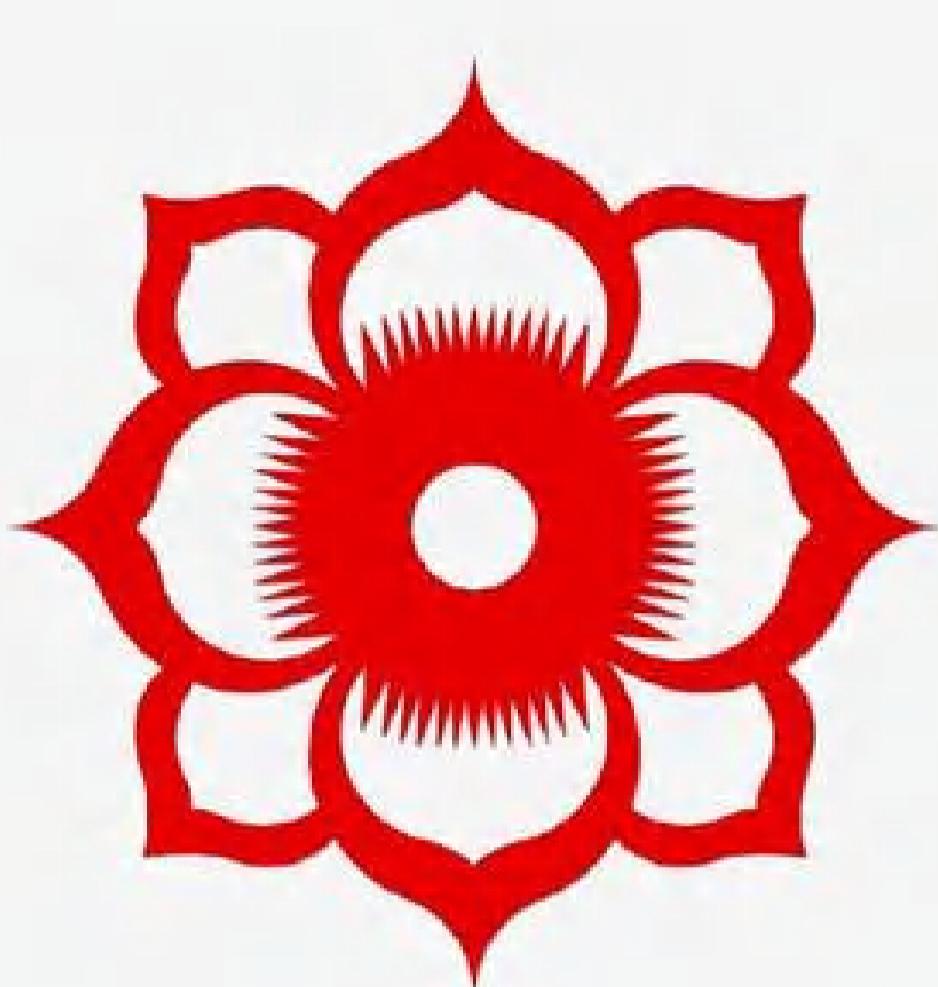
ここでは、切り紙と筆絵の境界を越えた「半切半絵」という独創的な様式が生まれました。色は黒・白・灰の三色にこだわり、シンプルながら深い情感をたたえています。職人の神業は「拔絲工芸」—0.3ミリという髪の毛よりも細い線を切り抜く驚異の技です。また、油灯で燻して作るぼんやりとした下絵は、独特の風合いを醸し出します。古代の文様や、梅・蘭・竹・菊といった高潔な植物を題材に、静謐で詩的な美の世界を切り開いています。



烟台切り紙（烟台市）：躍動する「海のマジシャン」

「海派切り紙」と名付けられたこのスタイルは、エビやカニ、魚たちが生き生きと踊り出すようなデザインが特徴です。特長は「套色切り紙」（多色紙を重ねて奥行き表現）という色紙を重ねる技と、「動態切り紙」（可動部品を組み込んだ）という動く仕掛けです。さらに、暗闇でぼんやり光る「発光切り紙」（蓄光材料を組み合わせた夜光作品）もあり、まるで海の底の神秘を再現しているようです。仙人が海を渡る「八仙過海」や、竜宮城の宴など、海の民の信仰とロマンが詰まった夢のような作品の数々です。





最後に

切り紙は、一枚の紙に各地の風土、歴史、人々の暮らしを刻み込んだ「文化地図」です。それらは、単なる手工芸品ではなく、中国という多民族・多地域国家の文化的多様性を象徴する鏡でもあります。





現代において、これらの伝統技法は新たな表現と出会い、国際的な芸術言語へと発展しつつあります。技術の継承と革新のバランスを取りながら、中国切り紙細工は、過去と現在、地域と世界をつなぐ文化的な架け橋として、その価値をさらに高めていくでしょう。



三度人生网

剪纸的魅力

国际交流员 刘凤

99

中国的剪纸，又被称为“窗花”，是一门流传千余年、为民众生活增添色彩与祝福的民间艺术。这项艺术在地域的广博与历史的积淀中，逐渐衍生出多样的风格，生动映照出不同地区的人文风情与生活气息。以红色为主调的细腻纹样，早已超越单纯的装饰功能，成为凝聚中国人祈愿与向往的民俗文化精髓。





历史与发展

剪纸艺术源远流长，其起源可追溯至北朝时期（386年-581年），并伴随着造纸术的发明与改良而不断发展。出土于新疆吐鲁番的团花纹剪纸作品，距今已有1400多年，寓意“团圆美满”，是现存史料中最早的实物证据。



剪纸最初用于祭祀与宗教仪式，自唐代（618年-907年）起逐渐普及为装饰艺术。至宋代（960年-1279年），随着造纸业的兴盛，剪纸艺术蓬勃发展，甚至出现了专门从事剪纸的工匠。到了明清时期（1368年-1912年），剪纸不仅在技艺上臻于化境，其文化内涵与艺术表现也愈发深厚，成为烘托节庆氛围不可或缺的重要元素。





技法与表现

剪纸主要有"剪裁"与"刻镂"两种技法，其中将纸张折叠后剪出对称纹样的"折剪法"也应用广泛。

创作题材丰富多彩，包含吉祥文字（福、寿等）、动物（十二生肖、鱼、鹤、蝙蝠、鸳鸯等）、植物（牡丹、莲、石榴、葡萄、南瓜等）、神话灵兽与人物（龙、凤凰、八仙、福禄寿三星等），以及反映日常生活与传说故事的场景（花瓶、灯笼、《三国演义》《西游记》《白蛇传》片段等），这些主题均与大众的生活紧密相连。

儒家文化的灵秀笔触

-山东剪纸艺术-

山东剪纸艺术在发展过程中，因各地不同的自然环境、历史文化和生活方式，形成了各具特色的风格。

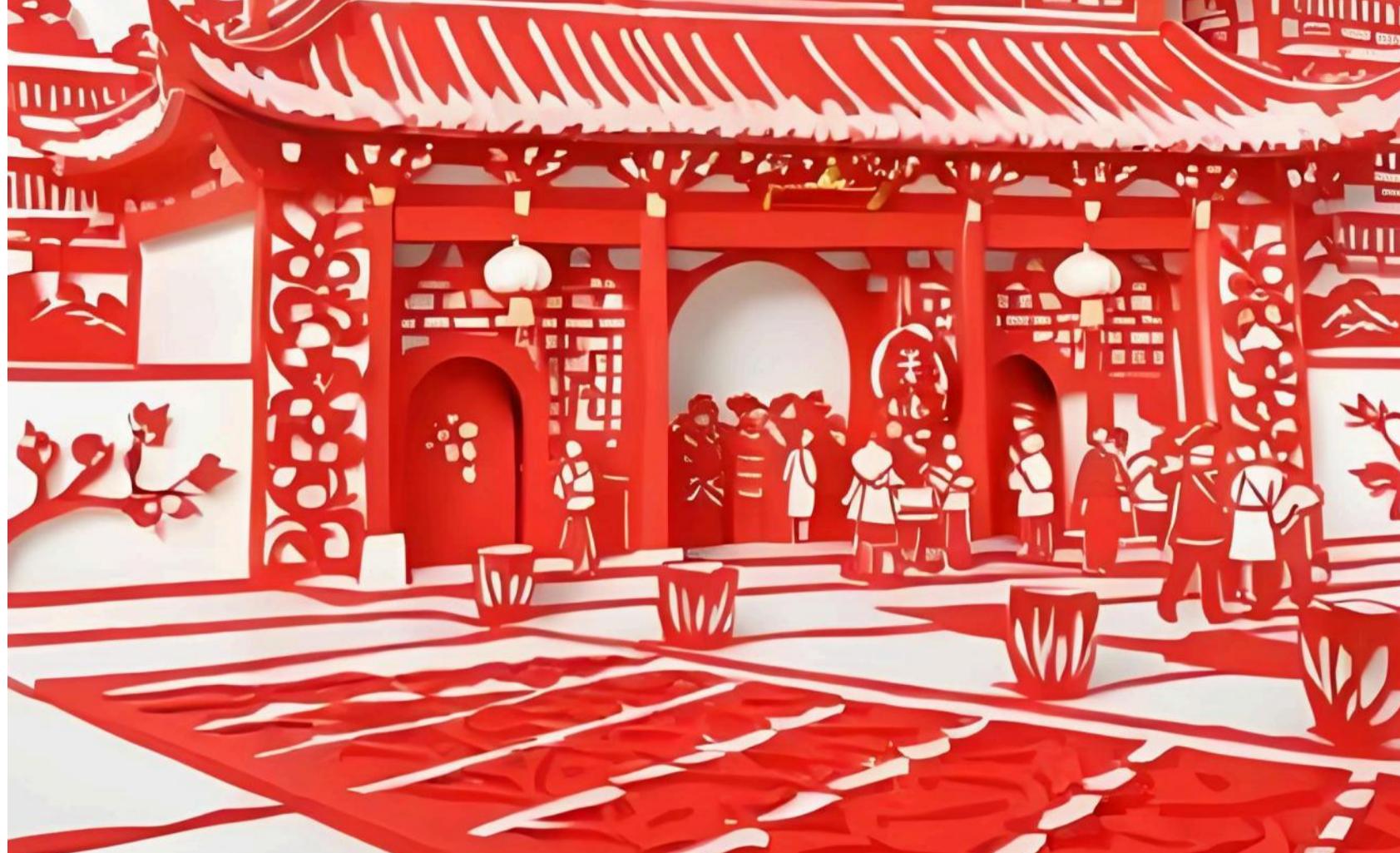
本文将介绍滨州、茌平、高密、烟台这四个代表性区域的剪纸艺术。





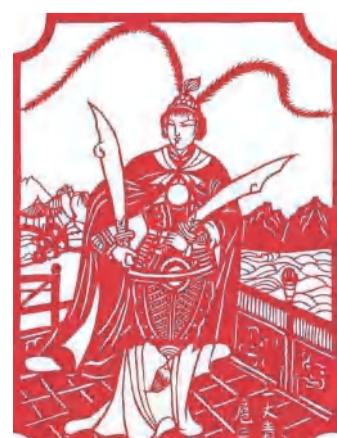
滨州剪纸（滨州市）： 雄浑的“黄河剪匠”

这里的剪纸以“大刀阔斧”著称，其风格犹如奔腾的黄河般豪迈壮阔。工匠们能一次叠裁数十层纸张，运剪利落、气势恢宏，令人叹为观止。最具代表性的是色彩绚丽的“五色门笺”——由红、绿、黄、粉、紫交织而成的门楣装饰，宛若家家户户的门面。无论是摇橹的船夫、耕作的农人，还是舞动的瑞狮，剪纸中跃动着黄河儿女的生活气息，将沿岸人民质朴而蓬勃的生命力凝固于方寸纸间。



茌平剪纸（聊城市）： 细腻的“运河故事家”

在运河名城聊城，剪纸匠人擅长驾驭发丝般的细线，展现出精妙绝伦的刀工。通过独特的“线刻剪纸”技法，作品能呈现如水墨画般细腻的浓淡层次，更在镂刻后施以淡雅彩绘，别具风韵。最令人称奇的是，这些剪纸能“立体化”呈现——将部件组合拼装，运河畔的亭台楼阁、《水浒传》里的豪杰英雄便跃然眼前。每一幅作品都藏着跌宕的故事，是能够唤醒观者想象力的灵动艺术。



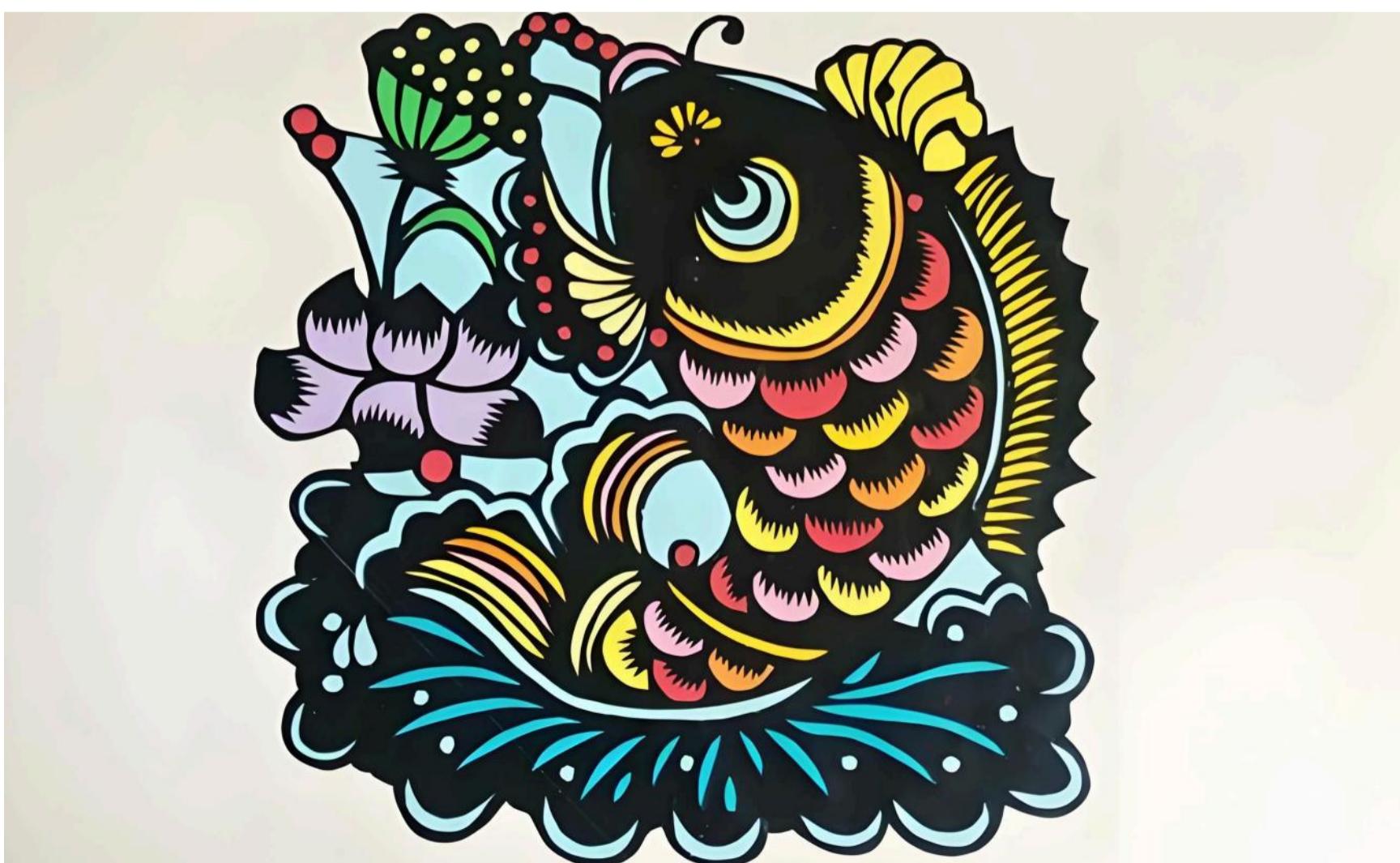
高密剪纸（潍坊市）： 雅致的“文人剪诗人”

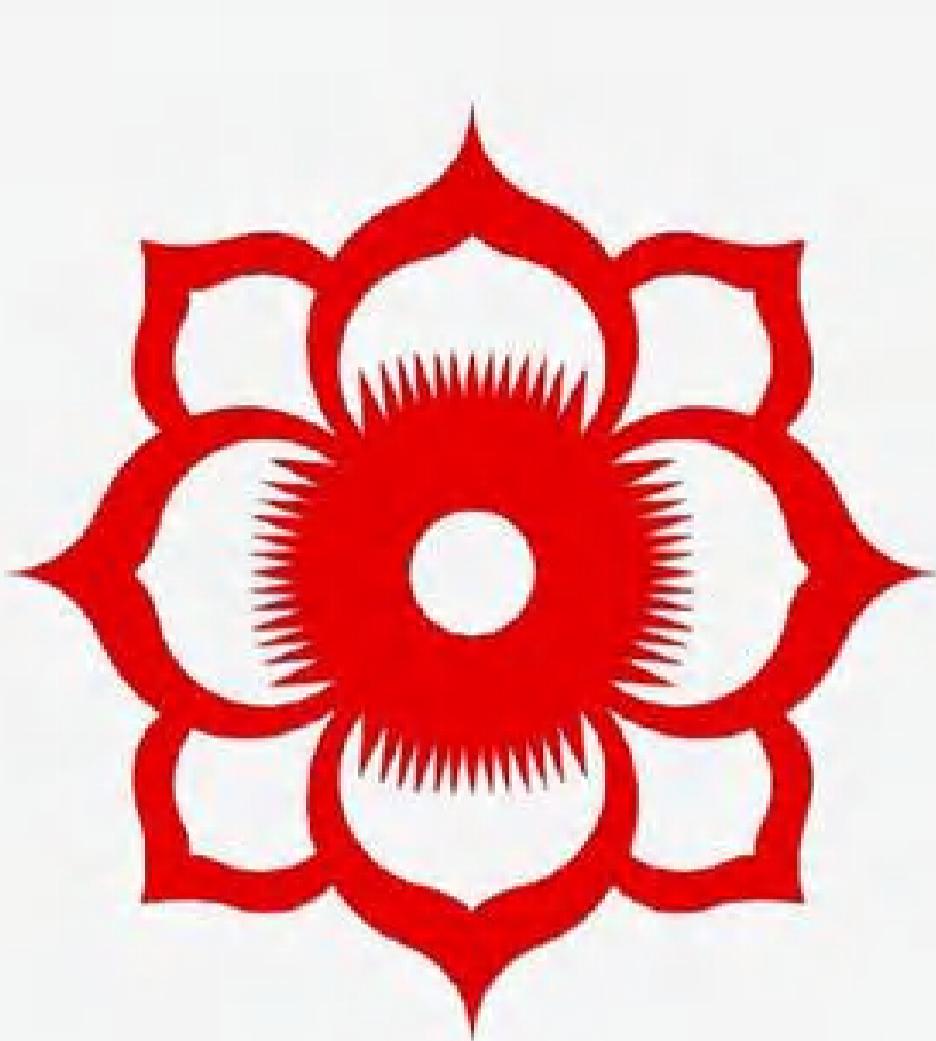
这里独创了“半剪半绘”的艺术形式，打破了剪纸与笔墨的界限。作品坚持以黑、白、灰三色为基调，于素朴中蕴含深沉意境。匠人展现的“拔丝工艺”，堪称绝技——能剪出细如发丝、仅0.3毫米的线条。更特别的是，以油灯熏染而成的朦胧底稿，赋予作品独特肌理。通过刻画古纹饰与梅兰竹菊等清雅植物，剪纸展开了一个静谧而充满诗意的美学境界。



烟台剪纸（烟台市）： 灵动的“海洋魔法师”

这里被誉为“海派剪纸”，其特色在于作品中的虾蟹鱼贝仿佛随时会跃纸而出。奥妙在于“套色剪纸”——通过多层彩色纸张叠加营造立体感，以及“动态剪纸”——在作品中嵌入可活动部件。更有运用蓄光材料创作的“发光剪纸”，在暗处会泛起朦胧微光，宛若重现海底秘境。无论是“八仙过海”的传说，还是龙宫盛宴的想象，这些充满海洋气息的作品，凝聚着沿海人民特有的信仰与浪漫情怀。





最后

剪纸，是一张刻录着各地风土、历史与生活印记的“文化地图”。它们不仅是手工艺品，更是中国这个多民族、多地域国家文化多样性的生动镜像。





在现代，这些传统技法正与新的表现形式交融，逐渐发展为国际化的艺术语言。在传承与创新的平衡中，中国剪纸艺术作为连接过去与当下、本土与世界的文化桥梁，必将持续绽放其独特价值。

图片来源：<https://image.baidu.com/>